



## とやま、祭り彩時季【十】

秋から冬にかけての祭礼と行事 写真・文／木原盛夫

## とやま、祭り彩時季【十】

秋から冬にかけての祭礼と行事 写真・文／本原盛夫

## CONTENTS

- 慈光院の火渡り法要・・・・・・・・・・ 4 P
- 蓮王寺の人形供養祭・・・・・・・・・・ 10 P
- 岩稲八幡宮の神送り・・・・・・・・・・ 15 P
- 【コラム】村芝居の情緒を残す・・・・・・・・ 23 P
- 池田浄瑠璃
- 有磯正八幡宮の「ふいご祭」・・・・・・・・ 34 P
- 上行寺のお会式・・・・・・・・・・ 41 P
- イルミネーション・・・・・・・・・・ 52 P
- 射水神社の新嘗祭・・・・・・・・・・ 56 P
- ・初穂曳（はつほひき）・・・・・・・・・・ 62 P
- 下夕北部地区の繭玉作り・・・・・・・・・・ 64 P
- すす払い・・・・・・・・・・ 70 P
- 伊勢玉神社「干支の大絵馬奉納」・・ 76 P
- 福野の「歳の大市」・・・・・・・・・・ 78 P
- 年越の大祓・・・・・・・・・・ 83 P
- 朝日神社・夕日神社の宮こもり・・ 88 P
- 加茂神社の鱒分け神事・・・・・・・・・・ 95 P
- 伊勢玉神社の奉射式（ぶしゃしき）・ 102 P



- 朴谷の獅子舞・・・・・・・・・・ 106 P
- 消防出初式・・・・・・・・・・ 112 P
- 厄払い鯉の放流・・・・・・・・・・ 119 P
- 利賀の初午（はつうま）・・・・・・・・ 126 P
- 【コラム】馬の芸能と信仰・・・・・・・・ 137 P

### ○慈光院の火渡り法要

火渡りは火で穢れを焼き清める荒行で、元々は修験者が行っていた禊の儀式。正式には柴燈大護摩法要（さいとうだいごまほうよう）という。

小矢部市にある真言宗の白馬山慈光院では、毎年10月17日に秋季大祭として午前大般若転読会、午後から柴燈大護摩法要が営まれる。

火がくべられた護摩壇の中に願い事の書かれた護摩木が投げ込まれ、やがて護摩壇が崩れ落ちると燃え殻が長さ3m、幅1.3mの炭の絨氈に敷きつめられる。導師らが不動明王の真言を唱えて炭火の上を渡った後、一般の信者や参詣者が無病息災、家内安全を祈り、合掌しながら炭火の上を渡る。

この火渡り法要に合わせて、大元堂にて年に一度「大元帥明王」のご開帳が行なわれる。

5P上下：山門と本堂の前に設えられた護摩壇。護摩壇と火渡りする炭を敷いた周囲は結界が作られている。





6 P：大元帥明王のご開帳が行なわれる大元堂。  
7 P上：火渡り法要は13時半頃から。本堂から僧侶が境内に下りてきて、結界の周りを歩く。  
7 P下：蠟燭の火が護摩壇に移される。  
8 P上中下：燃え上がる護摩壇に護摩木が投げ入れられる。護摩壇が崩れると、炭の上に均していく。  
9 P上下：無病息災、家内安全を願いながら熱い炭の上を歩く。





### ○蓮王寺の人形供養祭

10月の第2日曜日に、小杉にある蓮王寺で人形供養祭が開催される。蓮王寺でも昔から持ち込まれた人形を個別に供養していたそうだが、現在の人形供養祭は富山人形供養の会が主催して行われている。人形供養の会は高田卸方屋、人形のタカツネ、キタノ商事の3社で1995年（平成7）に設立し、この年に第1回の人形供養を蓮王寺で行ない、以降、毎年開催している。平成14年には蓮王寺の境内に、人形供養の聖観音像を建立している。

供養祭は13時半から営まれ、最初に境内の聖観音像の前で般若心経が唱えられる。その後、人形を持参した人達が受付で名前を書いた護摩木がお炊き上げされ、護摩祈祷が行なわれる。

供養が終わった人形たちは業者の方々が引き取り、処理される。昔なら人形もお焚き上げ出来たのだろうが、今は素材にビニールや金属なども混じっているのですべてそのまま焼却するわけにはいかないようだ。





1 1 P：供養のため、蓮王寺の境内に持ち込まれた人形の山。

1 2 P：聖観音像の前で般若心経を唱える僧侶。1 3 P：例年は境内で護摩供養を行なうが、2 0 1 9年は台風の影響で風が強かったため本堂で行なわれた。





県内では蓮王寺の他に、南砺市の高瀬神社と高岡市の射水神社が年に一度人形供養祭を開催している。

射水神社の場合は人形感謝清祓式と名付けられ、6月30日の夏越の大祓の際に執り行われている。

14P：射水神社の人形感謝清祓式。供養のために送られて来た人形を、神職が幣で祓い清める。

#### ○岩稲八幡宮の神送り

神無月は旧暦10月で、現在の暦でいうと10月下旬から12月上旬頃にあたる。一般には出雲大社に全国の神が集まって会議が開かれるため、出雲以外のところには神様が不在になるため神無し月になったと言われている。もっとも全国の神様が集まって来るので出雲地方は神在月と呼ばれているとか、諏訪大社の祭神はあまりに身体が大きいので移動が大変だろうと他の神々が気遣って諏訪明神だけは出雲に出向かなくてもよいことになって長野の諏訪は神在月になったとか楽しい諸説も色々ある。

富山市岩稲の八幡宮ではそんな民間伝承を裏付けるように、10月末頃に出雲へ神様を送る神送りの行事が残っている。昔は10月31日に神送り、11月30日に神迎えを行っていたが今は人が集まりやすい10月の最終日曜日と11月の最終日曜日に変更された。

以前は神送りが午後4時、日が沈むのが早くなる11月の神迎えが午後3時からだったが、今は神送

りも午後3時になって境内はまだ明るい。少年団が盛んだった頃は境内に続く階段に、神様の通る道として子供たちがローソクを灯したそうだが、それも今は簡略化されてしまった。

境内の端に積み上げられた杉の葉に火がつけられると、白い煙が空に伸びて行く。杉の葉が燃えて炎が見えそうになると、子供が杉の葉を被せる。炎を見せないで白い煙を見せるのがポイントのようだ。以前は竹も一緒に燃やして、パチパチと弾ける音と煙で盛大に送ったという。

30分ほどで集めた葉が燃えると、神社で使われていたしめ縄や御幣が燃やされてお焚き上げが行われる。最後は子供たちがホースで水を撒き、神送りの行事は終了する。「また来月の神迎えもよろしくね」と言って子供たちにお菓子が配られる。神迎えも同じように境内で杉の葉を燃やして白い煙を空にたなびかせ、神様を迎えるそうだ。

県内では他に、射水市の加茂神社が神送りと神迎えを行っている。こちらは9月30日に神送り、10月31日に神迎えだ。加茂神社の方は実際に見た



ことはないが、神社の近くを流れる川に神職が小鮎を放す。神様が鮎に乗って出雲に向かわれるのだらう。

17P：岩稲八幡宮。旧細入村の他の神社でも嘗ては神送りが行なわれていたが、中断すること無く続いているのはここだけだそうだ。

18P上：神送りのお供えは小豆ご飯。昔はたくさんの方がお供えしたそうだ。

18P下：杉の葉に点火して神送りが始まった。





- 19P：白い煙りに乗って神様が出雲に向かう。  
20P：杉の葉が燃え尽きると、しめ縄や御幣を燃やしてお焚き上げをする。  
21P上：火の始末は子供達が担当。ホースで入念に水を撒く。  
21P下：「また来月の神迎えもよろしくね」と声をかけられ、お菓子が配られる。





22P：境内の隅には五輪塔がある。アチコチにあったものが集められて組み合わされたものようだ。日本では平安時代末期から供養塔、供養墓として造られている。こちらの五輪塔は14世紀前半に製作されたと推定され、旧細入村では最古のものだそうだ。

### ○村芝居の情緒を残す池田浄瑠璃

テレビはもちろん映画も無かった時代、村芝居は人々の娯楽だったようだ。江戸時代から明治時代にかけて普及したようで、劇団のある村もあった。

「とやまの民俗芸能」（北日本新聞社）にく西砺波郡福岡町も、村芝居の盛んなところであった。同町内の各劇団は、いずれも大正期に生まれた。同町上向田地区の狂笑団は大正二年（一九一三）、本領地区の民衆新劇団は同七年（一九一八）、木舟、柳川両地区の城址団は同八年（一九一九）、大滝地区の大隆団は同十二年（一九二三）にそれぞれ結成された。福岡町の農村地帯では俄芝居もよく演じられた。同町西村地区の俄芝居は、石川県能登地方の大工職人が伝えたといわれている。同町馬場地区の軽業も有名であった。こうした各地の村芝居は、太平洋戦争によって総て滅びた。戦後の一時期、復活したものの再び消えてしまったと書かれている。

他にも立山町池田、目桑では昭和初年頃まで村歌舞伎が行われ、上新川郡の大山町瀬戸地区、大沢野

町町長地区にも村芝居が伝承されていたことが記されている。

現在では村芝居を観ることはほとんどできないが、2016年まで立山町の新瀬戸小学校で「池田浄瑠璃」が演じられてきた。

池田浄瑠璃は立山町池田に400年ほど前から伝わる村芝居で、池田城のお殿様を喜ばせるために始まったとされる。池田城が上杉謙信によって落城してからは、池田に残った村人が農業をしながら年中行事として受け継いだ。昭和27年頃まで続けられたが、その後途絶え、昭和62年に復活し新瀬戸小学校の高学年が演じるようになった。

浄瑠璃は、三味線を伴奏にして物語の説明や登場人物の台詞などが語られる伝統芸能。人形を使った人形浄瑠璃が一般的だが、池田浄瑠璃は人が演じ、浄瑠璃芝居とも言われている。これまで上演してきた演目に「傾城阿波の鳴門 巡礼の段」（けいせいあわのなると じゅんれいのだん）、「傾城阿波の鳴門 親子愛感動の段」（けいせいあわのなると おやこあいかんとどうのだん）、「仮名手本忠臣蔵

五段目」（かなでほんちゅうしんぐら ごだんめ）、「仮名手本忠臣蔵 九段目」（かなでほんちゅうしんぐら くだんめ）、「絵本太功記 尼崎の段」（えほんたいこうき あまがさきのだん）、「玄海婆物語」（げんかいばものがたり）などがある。

池田浄瑠璃は昭和62年（1987）に復活し新瀬戸小学校の児童によって30年間上演されてきたが、平成28年（2016）3月31日をもって新瀬戸小学校が休校になった。これで上演も休止かと思われたが卒業生などのサポートもあり、11月の公演が行われた。演目は第一部が「仮名手本忠臣蔵 五段目」、第二部が「傾城阿波の鳴門 巡礼の段」前編だった。

しかし、出演する児童が集まらず2017年からは休演となっている。

26-27P：昭和30年頃と思われる、父親が所属していた福岡町の素人芝居の劇団。











28P上：会場となった新瀬戸小学校の体育館入口に設置された公演案内。

28P下-29P：第一部の演目「仮名手本忠臣蔵 五段目」。30-32P：第二部の演目「傾城阿波の鳴門 巡礼の段」。33P：出演者全員の記念撮影。

### ○有磯正八幡宮の「ふいご祭」

ふいご（鞴）とは火を起こすために空気を送る機械で、鋳造にも使われる。

ふいご祭は有磯正八幡宮の御祭神の一柱である鏡作り・鋳物師（いもじ）の祖神である石凝姥神（いしごりどめのかみ）に、関係企業や団体の事業繁栄・職場安泰を祈る神事。

午前10時から社殿の中で神事が執り行われ、昨年（2015年）の鋳造式で鋳造された、「随神像の矢羽（やばね）」「真澄鏡（まそかがみ）」「社紋入り銅鐸」が奉納された。

境内で行なわれる鋳造式では、鋳物師の技が石凝姥神に捧げられる。ちなみに、ふいご祭は古くから行なわれてきたそうだが、鋳造式は2011年（平成23）から斎行されるようになったという。

2016年は、御神鳥の「かわせみ」（原型：塚原俊也）、「誓い獅子」（原型：南部祥雲）、有磯正八幡宮社紋が鋳造された。





3 5 P上：神事では神職二人によって「火きり」が行なわれ、ご神火が陰灯に仕舞われる。

3 5 P下：社殿での神事が終わると、境内で鑄造式の神事が斎行される。

3 6 P：お載いの後、溶解炉にふいごで風が送られる。

3 7 P上下：陰灯からご神火が取り出され、溶解炉に入れられる。

3 8 P上中下：炉で溶かされた材料が、型に流し込まれる。



and more...